

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520641

研究課題名(和文)

聖人祝日曆写本の生成—ヴァチカン・オットボーニ・ラテン写本163番の総合的研究—
研究課題名(英文) Genesis of a martyrology manuscript. A study of the Vatican Ottoboni Latin no.163

研究代表者：

佐藤 彰一 (SATO SHOICHI)

名古屋大学・文学研究科・特任教授

研究者番号：80131126

研究成果の概要(和文)：研究着手の出発点であるトゥールのサン・マルタン修道院長アゲリクスのみならず、12月30日の聖人として5世紀のトゥール司教ペルペトゥスについての記述が含まれていることを明らかにした。中世の聖人祝日曆の系統を大きく二分するものとして、「アドン祝日曆」(860年)と「ウズアルドゥス祝日曆」(865-870年)がある。より広く参照されたウズアルドゥスの聖人祝日曆では、ペルペトゥスは4月8日が祝日とされているから、本写本がアドンの聖人祝日曆の系統に属する蓋然性が極めて高いことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Along with *Agericus*, abbot of Saint-Martin in the 7th century, who has been at the outset of this research project, our inquiry into the manuscript of Ottoboni Latin n.163 delivered us a more detailed description of *Perpetuus*, Archbishop of Tours in the fifth century, to be celebrated on the 30th December. In a medieval Christian martyrological tradition, celebration of *Perpetuus* has been divided into two different days, one on the 30th December, the other on the 8th April. The former belongs to Adon's martyrology and the latter Usuardus' tradition. If we can suppose the celebration day of Perpetuus as being a clue for permitting an affiliation of this manuscript, we may decide it in favour of Adon's martyrological tradition.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：西洋中世史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：中世史

1. 研究開始当初の背景

1997年私は博士号取得論文『修道院と農民』を上梓したが、この研究は新発見のトゥール、サン・マルタン修道院の一群の断片化した会計文書を通して、解明が進んでいなかった7世紀の農村社会の実像を明らかにすることを目的にしていた。この会計文書の作成時期に当該修道院長を務めたのがアゲリクスという人物であることは、会見文書に2カ所そ

の名前が登場することから明らかである。だが、この人物に関する史料の所見は皆無であるといつてよい。『聖エリギウス伝』と、改竄されたある教皇特許状、そして本研究課題である聖人祝日曆の、合わせて3点にその名前だけが残されているにすぎない。前2者はアゲリクスの来歴に全く手がかりを与えてくれない。聖人祝日曆の探究が、間接的にもこの人物がどのような素性の人物かを推定する手がかりを与えてくれる可能性がある

と思われたのである。

2. 研究の目的

アゲリクスの名前が4月11日を祝祭日として記載している、これまで知られる唯一の記録は、現在ローマのヴァチカン図書館にオットボーニ・ラテン写本163番として分類されている聖人祝日暦である。歴史的にほとんど知られることがなかった7世紀中葉のトゥールの無名の修道院長が、幾千とある聖人祝日暦には記載されていないのに、ヴァチカン・オットボーニ163番に唯一記録されているのか、その理由を明らかにすることは、当該写本の素性を解明するばかりでなく、翻って先に挙げたトゥールのサン・マルタン修道院での会計文書作成の背景についての認識を深めることになる。

3. 研究の方法

本研究に着手するにあたって、2方向の戦略があった。第1は、聖人祝日暦写本の特性に鑑みて、その作成の折に参照された先行写本の探求の方向であり、第2は当該写本テキストの解読である。聖人祝日暦写本について、現在の世界の第一人者は、パリのジャン＝ルー・ルメートル教授であり、筆者はたまたま20年来の知己ということもあって、この問題についての助言を仰いだところ、このヴァチカン写本が14世紀という遅い時代に書かれたところから、まず確実に手本にしたより古い写本が存在したはずであるということである。それが何らかに事情で現在まで伝来しなかった。こうした事情を知る手がかりは、17世紀にオットボーニ枢機卿がこの写本を入手した先の、当時ローマの名門貴族であったアルテンプス大公が、いかなる手段で、またどこからこれを入手したかを追跡調査で明らかにすることである。アルテンプス大公家の記録は、現在ローマの近郊にあるガレーゼ城に、私文書として保管されており、アクセスが容易ではないことが判明した。結局研究計画の期間中に、ここを訪れて調査することができなかったのは残念であった。

そこで研究はもっぱら第2の方面に向けられることになった。すなわちオットボーニ・ラテン163番の転写と解読である。

4. 研究成果

19世紀の末にH・エレンスベルガーという研究者が、ヴァチカン図書館所蔵典礼関係写本のカタログを作成しているが、その中でオットボーニ163番は、書体から14世紀に作成されたと考えられること、その作成地がイギリスのソールズベリィであったとこ

との2点を指摘している。後者の理由としてエレンスベルガーが挙げるのが、この写本の第1葉表に、鉛筆で記された微かな走り書きで、それは「Collegii Anglicae」の文字であった。これは筆者もまた当該写本を手にとって確認している事実である。聖人としてアングロ・ノルマン系の地方聖人が多く加えられているとしているが、これは決め手にはならない。トゥールのサン・マルタン修道院長アゲリクスの祝祭日であった4月11日は、聖人祝日暦上の記載は「III Idus Aprilis」となるが、この同じ日を祝祭日とするイングランドの聖人として隠者聖グトラスがいる。中世イングランドで作成された聖人祝日暦に数多く当たって見たが、全てが「Sancti Guthlaci confessoris tui anachoreta」とか、「Sancti Guthlaci anachoretæ」と記述するだけである。10世紀後半のものとは推定されるソールズベリィ大聖堂図書館に収蔵されていた聖人祝日暦写本では、ごく簡単に「Sancti Guthlaci presbyteri」と記すのみである。オットボーニ163番に見られるように「In Britannia, depositio sancti Guthlaci episcopi et confessoris proprii et anachoreti」なる表現は皆無である。そもそもイングランドで作成された写本であれば「In Britannia」は極めて不自然な表現という他はない。わざわざ在地で利用する写本において、イースト・アングリアとマーシア王国の境界地帯クロウランドで、隠者として孤独な生活を続けた大聖人を「In Britannia」と表現することは考えがたい。この点からしても、この写本の作成地はイングランドではなく、イングランドと地理的に近い関係にあり、7世紀には深い交流があったロワール川河口地帯か、ノルマンディ地方が想定されるのである。

もう1点明らかになった事実は、この写本が西欧中世の聖人祝日暦のどの系統に属するかに関わる事実である。信仰のために殉教したり、あるいは殉教にいたらずとも、様々な迫害や艱難辛苦に耐えたりして信仰を守り抜いた聖人を、その物故した記念日に顕揚し、祈りを捧げるのはキリスト教徒の重要な典礼であったから、すでにローマ帝国がキリスト教を公認して以来、そうした祝日暦が作成されていた。有名なのは聖ヒエロニウムスが作った「ヒエロニウムス聖人祝日暦」である。これとは別に教皇庁の「ローマ聖人祝日暦」なども知られる。しかし9世紀に大きな転機が訪れた。それは教会改革の一環として行われた典礼の整備である。この中でパリのサン・ジェルマン・デ・ブの修道士ウズアルドゥスや、ヴィエンヌ司教アドンによる新たな聖人祝日暦作成の動きがあった。アドンは860年に完成し、ウズアルドゥスは865-870年に完成したとされている。この二つ

の聖人祝日暦の間で、時として同一聖人が異なる日が祝祭日とされる事例が見受けられる。これはアドンとウズアルドゥスがそれぞれ独自の判断で古い記録を取捨選択したことによって生じた食い違いであった。この点で興味深いのは、5世紀のトゥール司教ペルペトゥスの祝祭日である。アドンの聖人祝日暦ではペルペトゥスのそれは12月30日に設定されている。これにたいして、ウズアルドゥスのそれでは4月8日が祝日になっている。肝心のオットボーニ163番ではアドンの祝日暦と同じ12月30日が祝祭日とされているのである。ここから本写本がアドンの聖人祝日暦の系統に属する蓋然性が極めて高いことが明らかになった。しかもペルペトゥスの記事は、かなり詳細に敷衍されている。すなわち「(Perpetuus) qui basilicam beati Martini mirio opere fabricavit. Hec generis pro sapia nobiliter sublimat. Nobilitatem mentis decoravit miraculorum gloria, cui ulenti beati Martini corpus transferre et per triduum non ualenti, turbatis omnibus ad amborum meritum ostendendum, angelica uisitatio apparuit, monens ut manus apponerent, simulque cum eis manus apposuit, quo peracto nulli comparuit」と続いている。確かに聖マルティヌスの聖堂の建設に功績があったものの、彼の記憶はトゥール地方を越える広がりをもったとは言えない。こうした点を勘案するならば、オットボーニ163番はロワール川地方からノルマンディ辺りをその作成地と推定するのは、妥当ではないかと思われるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

- ① 佐藤彰一 19世紀フランスの歴史学と歴史教育 『19世紀学研究』第4号、2010、3-12 (査読有)
- ② 佐藤彰一 哲学的解釈学からテキスト解釈学へ—歴史テキストを軸にして— 『テキスト布置の解釈学的研究と教育』Vol. 4, No.2, 2010, 95-10. (査読有)
- ③ 佐藤彰一 「鶴島博和・春田直紀編著『日英中世史料論』『社会経済史学』75-4、2010, 96-98 (査読有)
- ④ 佐藤彰一 「長谷川宜之著『ローマ帝国とア

ウグスティヌス—古代末期北アフリカの司教』 『歴史評論』No.720、2010, 97-101、(査読有)

- ⑤ 佐藤彰一 「Olivier BRUAND, *Les origines de la société féodale. L'exemple de l'Autunois (France, Bourgogne)*」 『西洋中世研究』No.2, 2010, 189-190、(査読有)
 - ⑥ 佐藤彰一 「Kathleen DAVIS, *Periodization & Sovereignty. How Idea of Feudalism & Secularization govern the Politics of Time.*」 『西洋中世研究』No.2, 2010, 193-194、(査読有)
 - ⑦ 佐藤彰一 「Joachim HENNING (ed). *Post-Roman Towns, Trade and Settlement in Europe and Byzantium* [Millenium-Studien, 5-1, 5-2]」 『西洋中世研究』No.2, 2010, 200-201、(査読有)
 - ⑧ SATO, Shoichi, Quest for the origin of a manuscript, Vatican Ottoboni Latin No.163 (1), in *HERSETEC: Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration*, Vol., 3, No.1, 2010 (2009), 23-33. (査読有)
 - ⑨ SATO, Shoichi, La Clause pénale dans les chartes mérovingiennes et son implication, in S.SATO (éd.) *Herméneutique du texte d'histoire. Orientation, interpretation et questions nouvelles*, 2009, Nagoya, 45-51 (査読有)
 - ⑩ SATO, Shoichi, Le peuple franc et son historiographie (1) in *HERSETEC: Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration*, Vol.2, No.1, 2008, 43-63 (査読有)
- 〔学会発表〕(計7件)
- ① SATO, Shoichi, Sindbad jusqu'au Japon? Les échanges maritimes entre le Proche-Orient et l'Extrême-Orient vus principalement à travers les trésors du Shoso-in et du Horyu-ji, Colloque international et interdisciplinaire: LA RENCONTRE DES CIVILISATIONS AUTOUR

DU MONDE MUSULMAN (II^e - VIII^e siècles H)
(VIII^e-XIV^e siècles AD) organisé par Michel Sot,
Jean-Pierre Van Staëvel et Dominique Barthélemy,
Université Paris-Sorbonne Abou Dhabi, les 9, 10
mars, 2011.

② 佐藤彰一 学知とその社会的還元-コレージュ・ド・フランスの場合- 日本学術会議
中部部会 2009年12月4日

③ SATO, Shoichi La clause pénale dans les
chartes mérovingiennes et son implication,
Sixth International Conference,
Hermeneutic Study and Education of
Textual Configuration, “Herméneutique du
texte d’Histoire”, 7~8, March, 2009, Tokyo
International Forum.

④ 佐藤彰一 19世紀フランス歴史学と歴史
教育 新潟大学19世紀研究所主催 鈴木
佳秀先生退職記念講演会
2009年1月12日

⑤ 佐藤彰一 12世紀ルネサンス再考-アリ
ストテレス受容をめぐる最近の動向-
西洋中世学会準備委員会・日本中世英語英
文学会共催「若手研究者セミナー」招待
講演 慶応大学 2008年10月25日

⑥ 佐藤彰一 メロヴィング国家構造論の試み
島根県民会館 第58回日本西洋史学会
大会招待講演 2008年5月10日

⑦ 佐藤彰一 ヨーロッパ中世の封建制と国
家研究の現在 日本法制史学会第60回大
会(名古屋大学) 2008年4月20日

[図書] (計4件)

① 佐藤彰一, 畑奈保美 訳
B. グネ著『オルレアン大公暗殺-中世フラ
ンスの政治文化-』岩波書店, 2010, 418p.

② SATO, Shoichi, WICKHAM, Chris et ali.
Herméneutique du texte d’histoire.

Orientation, interpretation et questions
nouvelles (歴史テキストの解釈学: 針路、
解釈実践、新たな諸問題) 名古屋大学文学
研究科, 2009, 245p.

③ 佐藤彰一 中世世界とは何か
岩波書店, 2008, 292p.

④ 鈴木佳秀, 葛西康德, 石井紫郎, 佐藤彰一他
これからの教養教育 東信堂, 2008, 222p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 彰一 (SATO SHOICHI)

名古屋大学・大学院文学研究科・特任教授
研究者番号: 80131126

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし